溜池通信 vol.439 *Biweekly Newsletter* *March 19, 2010*

双日総合研究所
吉崎達彦

Contents

****

特集：政権交代から半年後の政治風景 1p
＜今週の”The Economist”誌から＞
”Not whaling but drowning”「捕鯨するより溺れるな」 7p
＜From the Editor＞ 龍馬ファン 8p

****

特集：政権交代から半年後の政治風景

今週 3 月 16 日で、鳩山政権は発足から半年を迎えました。昨年 8 月 30 日の総選挙では 300 議席以上を獲得し、前途洋洋に思われていた民主党政権ですが、マニフェストの多くは実行できず、「政治とカネ」問題で非難を浴び、普天間問題も視界不良です。そして内閣支持率は、わずか半年で半減してしまいました。このままでは 7 月の参院選も、簡単には勝たせてもらえそうにありません。

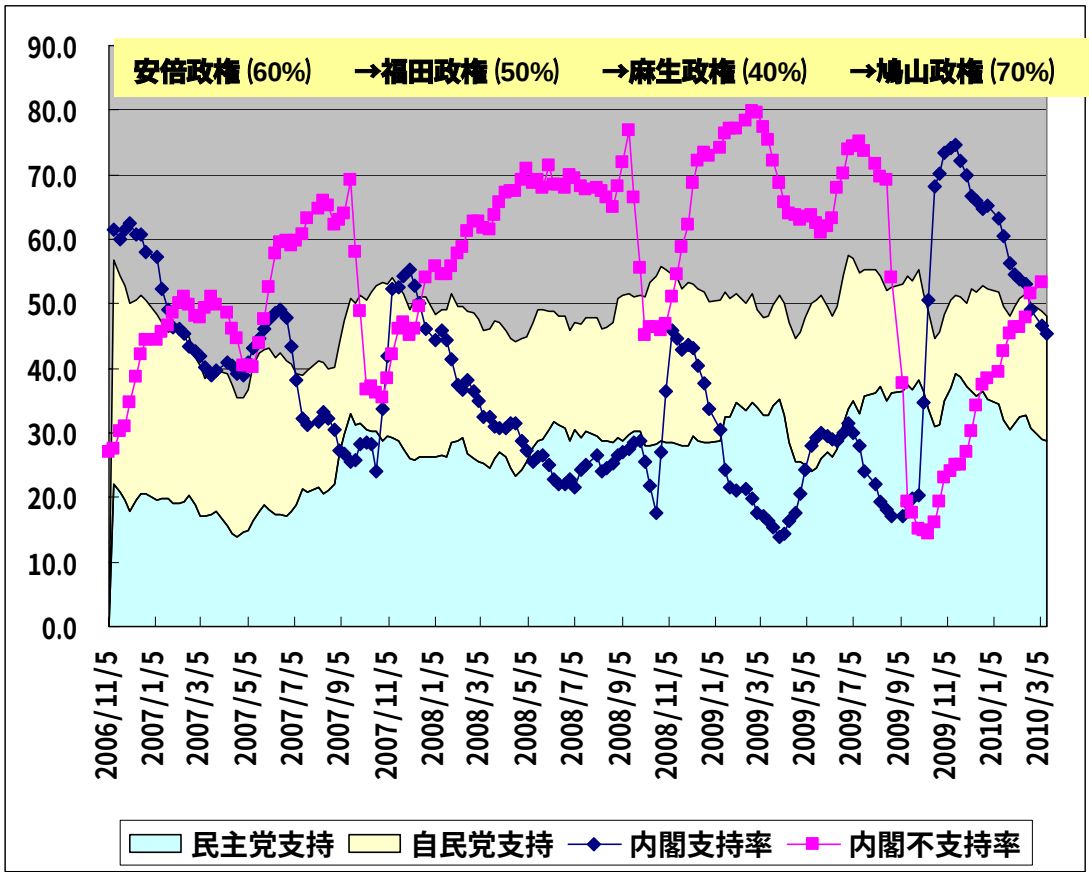
鳩山政権の一体どこに問題があるのか。自民党の反攻は可能なのか。そして「第三極」をめぐる動きはどうなるのか。政権交代からの半年を振り返りつつ、日本政治の現状について考えてみました。

●「今度こそ」のはずが、「今度もか」

まずは次ページのグラフをご覧いただきたい。本誌のいつもの手法であるが、フジテレビ『新報道 2001』が毎週、公表している世論調査を加工したものである。この調査は首都圏 500 世帯とサンプル数が少ないので、週ごとのブレが大きくなる。そこで「3 週間移動平均」を採用して、動きを滑らかにしてみた。その結果、**2006 年秋からの内閣支持率が、きれいに 4 つの山を描いた**。

過去の 4 代の政権は、①（発射台の高さは違うものの）秋に高い支持率で発足し、②その後は着実に支持率を低下させ、③翌年にいったん盛り返すが発足時を超えることはできず、④ 1 年後には退陣を余儀なくされる、というパターンをたどっている。このグラフを見る限り、今後の鳩山政権も同様な道筋をたどりそうに見える。

○過去４代の政権支持率の推移



これまで盛んに言われてきたのは､｢自民党は安倍～福田～麻生の政権たらいまわしによって国民の信を失った｣ということである。事実、この間に自民党の支持は減り続け、その分、民主党が支持を伸ばした。やはり**選挙の洗礼を受けていない政権は弱い、**というのが自民党政権ラスト３代の教訓だった。

そこでとうとう昨年夏に総選挙が行なわれ、地滑り的な結果が出た。久々に選挙で正統性を得た政権として、鳩山内閣が発足した。そうなると支持率は高く出るし、有権者の間には､｢自分たちが選んだ政権なのだから､少々の失敗は大目に見よう｣という気持ちが生じる。いわば、**政治に対する「オーナーシップ感覚」が生じる**わけで、これは民主主義のあり方として望ましいことである。

ところが鳩山政権の支持率は、過去３代の政権とほとんど同じ動きを続けている。そして政権発足半年後には、支持率はほぼ半減し、不支持が上回る結果になった。しかも現政権に向けられている批判の中には､｢政治とカネの問題｣｢首相の言葉の軽さ｣｢官邸の機能不全｣｢意思決定システムの不在｣など、自民党時代と共通するものが少なくない。

選挙で勝っても安定政権ができないのであれば、日本政治の安定は永遠に果たされないことになってしまう。いったい何がおかしいのだろう。

●「天下分け目」の参院選に向けて…

全国的にはベタ記事扱いだったが、先週 3 月 14 日には岩手県久慈市で市長選挙が行われていた。以下は岩手日報の速報記事から。

○久慈市長に山内氏再選

任期満了に伴う久慈市長選は１４日投票が行われ、即日開票の結果、現職の山内隆文氏（58）が、新人で前県南広域振興局北上総合支局長の遠藤譲一氏（56）＝民主党県連、社民党県連合推薦、同じく新人で会社役員の宮古邦彦氏（70）を破り、再選を果たした。投票率は 70.61%。

▽久慈市長選開票結果（選管最終）
当　１０５６２　山内　隆文　無現
**　　１０５０９　遠藤　譲一　無新**
**　　　５８２　宮古　邦彦　無新**

人口 3 万 7000 人の町の選挙で、53 票差の結果が出たということは、相当に激しい選挙戦であったことは想像に難くない。とにかく「**小沢幹事長の地元で、民主党の候補がわずかに及ばなかった**」ということは、与党に相当な逆風が吹いていることを意味しているのだろう。2 月 21 日には、長崎県知事選と町田市長選において与党 3 党が推薦する候補が大差で敗れているが、それに続くショックといえる。

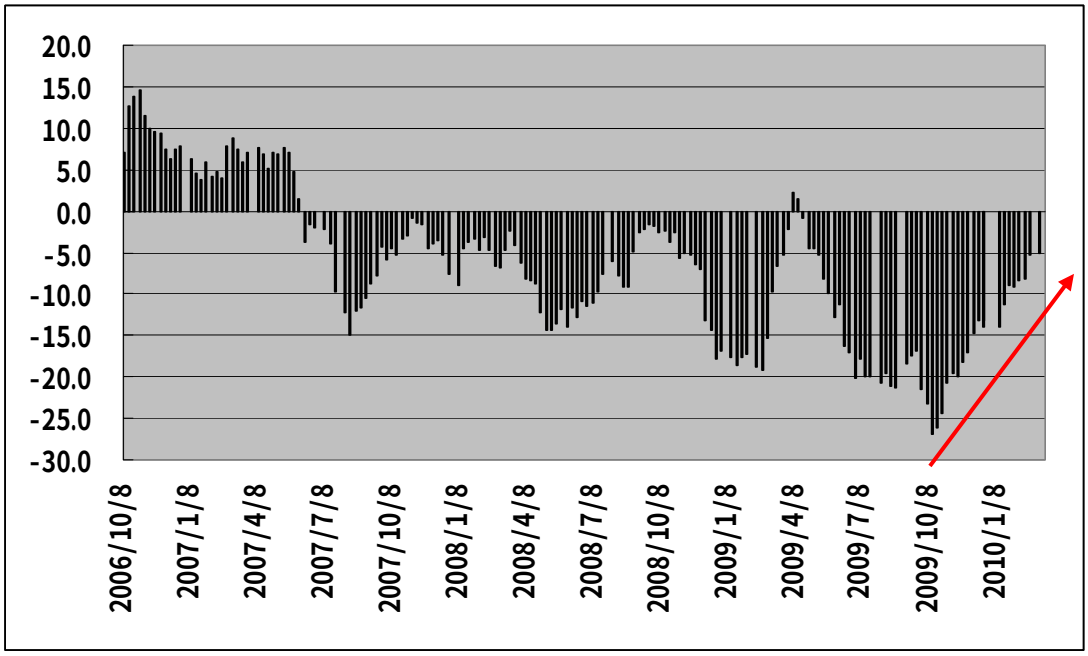
ここまで来ると、7 月の参院選はもうそれほど先ではない。そしてその次の国勢選挙は 2013 年の参院選までない。ちょうど 2009 年の衆院選の 4 年後に当たるので、おそらく 2013 年はダブル選挙となるのだろう。民主党としては、この夏に衆参の単独過半数を確保してしまえば、もはや連立相手に対する気兼ねも不要になる。文字通り**政策運営において、「3 年間のフリーハンド」を得ることができる**のだ。

しかしながら、見通しが明るいとはいえない。次ページのグラフは、先ほどの『新報道 2001』調査の民主党と自民党の支持率の差を、やはり 3 週間移動平均でまとめてみたものだ。昨年 10 月から現在にかけて、一貫して両党の差は縮まっている。世間一般の認識とは違って、**自民党は「与党に対する批判票の受け皿」として機能している**のだ。

もしも次に控えているのが衆議院選挙であれば、事情は変わってくる。なにしろ有権者は、昨年 8 月にあれだけ明確な形で自民党に「ダメ出し」をしたのである。自民党が今すぐ政権に戻りたいと言えば、「まだ早い」「反省が足りない」という答えが出るだろう。

ところが次は参院選である。これまで何度も繰り返されてきたように、**参院選といえば有権者が「与党に対してお灸を据える」場所**である。おそらく有権者は、民主党政権に対して遠慮のない評価を下すだろう。その結果は、「衆参ねじれの継続」ということになるのではないだろうか。このことは政策決定の速度を著しく低下させることになるが、鳩山内閣に対する信認がないのであれば、それは致し方ないということになる。

○「自民党－民主党」支持率の推移



別の見方をすれば、今や民主党はかつての自民党と同様に、「政権与党」として認識されている。つまり、有権者にオーナーシップ感覚があるからこそ、野党に投票して現政権に試練に与えようとする。民主党の側に求められるのは、みずからが成長することで期待に応えることでなければならない。

●民主党の「失敗の本質」とは？

それでは民主党にとって、この半年間のどこに問題であったのか。

もしも答えが「政治とカネ」の問題だけであれば、こんなに簡単なことはない。おそらく小沢幹事長が「辞任カード」を切ることで、この問題はクリアできる。そうすれば参院選での単独過半数確保も、けっして不可能ではないだろう。逆に言えば、それ以外の方法ではこの問題は片付かない。例えば、鳩山政権が企業団体献金を禁止したところで、政治不信が一気に解消するとか、支持率の向上に大きく寄与するとは思われない。

1 年前がちょうど同じであった。民主党は西松問題で窮地に追い込まれたものの、小沢代表が辞任することで再浮上を果たした。鳩山政権はそのお陰で誕生したようなものである。ことによると既に小沢幹事長は、いつ辞任カードを切るか、その後の自らの地位をどう保全するか、党内の体制をどうするか、などに思いを馳せているのかもしれない[1]。

[1] もっともここで幹事長を辞任すると、いよいよ政治家として「一丁上がり」になってしまう恐れもあり、最後まで地位にしがみつくのかもしれない。つまるところ、勝つも負けるもご本人次第としか言いようがない。

ただし、鳩山政権が抱えている問題はそれだけではない。一言でいうならば、政権としての”Incompetence”（機能不全）であろう。

- **マニフェストに掲げた政策が実行できていない。暫定税率の廃止を取りやめたり、高速道路の無料化を限定したりしている。（今から思えば、そもそもマニフェスト自体が「大風呂敷」であったように思える）。**
- **財政が急速に悪化している。選挙前には「ムダを洗い出せば財源は出てくる」と言っていたが、子ども手当や高校の実質無償化などの恒久的措置が、埋蔵金や赤字国債で賄われることになった。（これでは、親の世代が子どもの未来を先食いしているようなものである）。**
- **普天間基地の移転先が決まらず、日米関係が不安定になっている。他方、鳩山首相が就任早々にぶち上げた「CO2 の 25%削減」や「東アジア共同体」は具体的な進展が見られない。**

逆に現政権がこれまでにあげた業績はというと、以下のように情報公開に関連するメニューが多く並ぶ。

- **事業仕分けの実施。これによって浮いた金額は小さかったが、財政を決定するプロセスを国民の前に見せることができた。**
- **日米の核持ち込み密約を公開し、従来の政府答弁の誤りを是正できた。**
- **外務省など一部の省庁で「記者クラブの廃止」を実現した。**

民主党のコアな支持者からすれば、これらは大きな前進ということになるだろう。しかし多くの国民にとっては、「お腹が膨れない」メニューばかりという見方もできる。一方で首相の言葉が二転三転したり、閣僚同士が互いに違うことを言い合ったりという局面もあり、「行き過ぎた情報公開」による混乱も少なくない。

あらためて考えてみると、野党は与党と違って「政治家を鍛える」チャンスが乏しい。まして民主党は 12 年間も野党のままだった政党である。大臣や政務三役の多くは「初体験」であり、彼らは大きな組織を動かしたり、マスコミに対応したりといった経験が少ない。それならば低姿勢な船出を目指せば良かったものを、鳩山政権は「脱・官僚依存」という旗を掲げてしまったがために、霞が関をいきなり敵に回す振る舞いに出てしまった。これでは多くの官僚が「面従腹背」になってしまうのも無理はない。

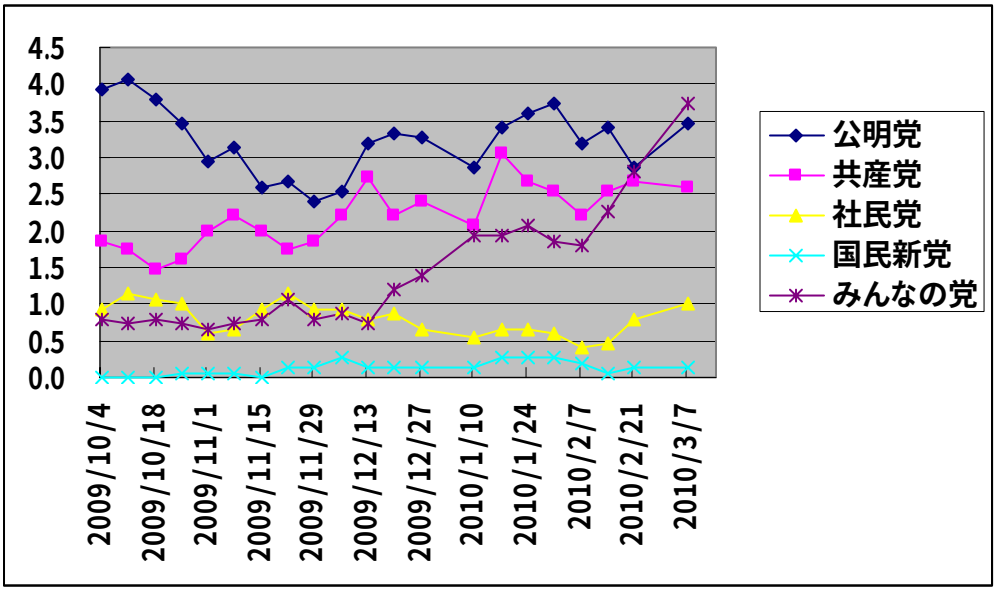
結果として、鳩山内閣は Incompetent な政権になってしまっている。この間に「阪神大震災」や「9/11 同時多発テロ事件」クラスの事件が起きたら、とんでもないことになるだろう。鳩山内閣には、なるべく早く効率的な政権運営を学習してもらうしかないのだが、この半年を振り返ってみても、「ラーニングカーブ」があまり感じられないのが困ったところである。

●「第三極」という可能性は？

民主党の支持率が低下する一方で、急浮上しているのが「第三極」への期待である。自民党はイヤ、民主党もダメなら、どちらでもない未知の勢力に期待してみたくなる、というのは自然な心理であろう。

特に目立つのは、みんなの党の支持率が急上昇していることである。

○少数政党の支持率の推移



これまた『新報道 2001』のデータを 3 週間移動平均で示したものだが、誕生して 1 年未満のみんなの党が、強力な組織を持つ公明党の支持率を上回っているのは驚きである。4～5%の支持があれば、参院選では比例代表でそれなりの議席数が見込めるので、文字通りキャスティングボートを握れるかもしれない。

この動きに刺激されたのか、自民党内で「新党立ち上げ」の動きが活発化してきた。3 月 15 日には鳩山邦夫元総務相が離党し、第三極を目指すことを明らかにしている。しかし政治ジャーナリストの上杉隆氏いわく、「与党から割れて出る新党は続くが、野党から割れる新党は消えてしまう」のがこの世界の常である。昨年の選挙前に党を出るのならともかく、今の自民党から抜けても大義名分に乏しい。そして鳩山邦夫氏の離党以後は、「新党」への熱意は急速に萎んでいるように見える。

いずれにせよ、日本政治の二大政党制への移行はまだまだ始まったばかりである。「第三極」は、二大政党にプレッシャーをかけるために有用な存在だが、本当に第三極を当てにしなければならないのでは、2 度も失望させられる有権者が気の毒というもの。まずは民主党が与党として成熟し、自民党が野党として清新になることが先決であろう。

＜今週の”The Economist”誌から＞

"Not whaling but drowning”　　Asia

「捕鯨するより溺れるな」　　March 13th 2010

＊日に日に高まる日本の捕鯨への批難。でも妥協は可能、というのが”The Economist”誌の見解です。いっそのこと、「調査捕鯨」を事業仕分けしてみるのはどうでしょう。

＜要約＞

軟骨は油まみれで消化に悪い。水銀も蓄積されている。知的な生き物が狩りに遭い、殺戮は大掛かりである。食えないものを、語れない方法で追うのが日本の捕鯨である。

英国の狐狩りと同様、妥協の余地はなさそうだ。1986 年以来、IWC は商業捕鯨を停止したが、日本は毎年、南極海に「調査」捕鯨船を送り込む。現場ではシーシェパードが日本船に攻撃を仕掛け、米国映画『コーブ』は日本のイルカ漁を描いてオスカーを受賞した。

これらの殺戮は海外での日本の評判を落としている。そしてアジアの友邦である豪州との関係も危うくしている。ラッド首相は来期の捕鯨をあきらめないと、国際司法裁判所へ提訴すると脅している。日本側は態度を硬化させているようだ。

昨年政権に就いた民主党は、かつての自民党ほどの捕鯨支持ではない。それでも捕鯨とクロマグロ漁で日本は国際的に包囲されている。鮨や刺身の減量を禁止されれば、多くの日本人が怒るだろう。日本は世界に対して背を向けていると批難する者もいる。

太地のイルカ漁はやや趣が違う。ここは日本でもかなり変わった場所である。4 世紀前に地元が鯨の追い込み漁を編み出した。古い絵には、梯子を使って鯨の大きさを測る様子が描かれている。鯨の魂を鎮める石碑もあるが、村人たちはそれで飢えを凌いできた。

イルカと同様に、村人たちは IWC の停止措置に含まれていない鯨を狩っている。IWC は 1986 年以来、原住民による最低限の捕鯨は認めている。ワシントン州のインディアンはすでに捕鯨を忘れたが、太地ではたぶん千年単位で沿岸捕鯨を続けているのだろう。

しかし南極海では事情が違う。産業規模の捕鯨であるし、文化的理由もない。マッカーサーは戦後、飢餓解消のために近代捕鯨を開始した。最近では、捕鯨は低利融資と補助金で続けられている。200 余名の捕鯨員と官僚たちは特殊利益団体のようなもの。そしてシーシェパードさえなければ国民は捕鯨に関心はなく、世論の支持もさほど強くはない。

おそらく一致点は見つかるだろう。元外務副報道官の谷口智彦は、調査捕鯨をあきらめて沿岸の商業捕鯨に戻れと説く。日本の国際的な評判もさることながら、南極海の鯨が日本の沿岸捕鯨の市場を危うくしている。IWC も同様な解決策を目指しているらしい。調査捕鯨を管理下に置くと同時に、小規模な商業捕鯨は認めるというものだ。

環境保全主義者たちは反対するだろうし、豪州もそうだろう。ただしラッドの熱意は純粋ではない。豪州は南極海の領海問題を意識しているし、次の選挙で緑の党の支援を当てにしている。それでも取引はあったほうがいい。鯨は食えなくとも、語りやすくはなる。

＜From the Editor＞　龍馬ファン

普段、滅多に NHK 大河ドラマを見ることはないのですが、昨年末の『坂の上の雲』で火が付いてしまい、ついつい『龍馬伝』も見てしまう日が増えています。福山雅治は土佐弁にやや難がありますが、長身で愛嬌があっていかにも「龍馬」らしく見えますね。筆者の周囲でも、「龍馬」が話題に上る機会が増えています。

NHK もカメラを変え、屋外の撮影を多くしてリアルな映像を目指すなど、やる気満々のようです。強いてイチャモンをつけるならば、オープニングの CG 映像が安っぽく見えるのが気になります。しかもなぜか、途中で、"Fighter", "Idealist", "Peace Maker"という言葉が浮かぶ。これらは龍馬に対する評価としては、あまり適当ではないと思うし、そもそもなぜ英語なのか。制作者の「龍馬」への理解が、少々浅いのではないかと心配です。

筆者なりの龍馬像を、英単語 3 つで表すならば、"Innovator", "Visionary", "Networker"ですね。本当は"Optimist"という言葉もピッタリだと思うのですが、日本語だとちょっと違う意味になるので、これは取り下げましょう。

それにしても、鳩山邦夫元総務相が離党の際に「龍馬のように」と言ったり、前原国交相からそれに対する苦情が出たりと、政治家には「龍馬好き」が多いようです。実際に幕末の群像の中でも、あれだけ先見の明があり、あれだけ情熱的で、あれだけ颯爽と時代を駆け抜けた人物は見当たりません。こんな歴史上の人物がいるということは、それだけでこの国の大いなる幸いではないかと思うくらいです。

実は筆者の手元には、「維新語録・龍馬めくり」なるものがあります。先日、広島県福山市鞆の浦（竜馬が「いろは丸事件」で過ごした場所）に行った際に、土産物として買ってきました。その 1 日目のセリフがカッコいい。

「君は男ぶりがよいから女が惚れる。僕は男ぶりは悪いが、やっぱり女が惚れる」

まっこと、龍馬だね。一度でいいから、ワシもこんなことを言ってみたいぜよ。

＊次号は 2010 年 4 月 2 日（金）にお届けします。

編集者敬白

―――

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問合わせ等は下記あてにお願します。

〒107-8655 東京都港区赤坂6-1-20　http://www.sojitz-soken.com/
双日総合研究所 吉崎達彦　TEL:(03)5520-2195　FAX:(03)5520-4945
E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com